～みやぎ景観フォーラム（平成 21 年度）概要～

日時：平成 21 年 10 月 20 日（火）
　　13:00～15:40
会場：塩竈市民交流センター
主催：宮城県・塩竈市・宮城県観光連盟
入場者数：約 250 名

１　基調講演　～市民が育てる景観形成～
　◇講師
　　清水慎一（しみず　しんいち）氏
　　（株式会社ジェイティービー常務取締役）

●仙台・宮城デスティネーションキャンペーンを行って、はっきりしたことがある。それは、いかに温泉や素晴らしい施設があっても、そのまちの暮らしが見えてこないところや、古いものを大事にしないところは観光客に見放されているという事実である。

●私は、景観というものは、市民と来訪者がお互いにせめぎ合い、つくり上げていくものと考えており、そのような仕組みを作ることが必要であると思っている。決して行政や企業が決めるわけではない。そういった意味で市民の方々は発言しなければならない。景観は誰かが決めるくれるわけではない。

●鞆の浦判決の意義は、景観利益が法律上の利益のみならず公益と認定されたこと。埋立てによる利便性の向上は必ずしも観光に繋がるとは限らない。一度壊した風景は元に戻らないということも踏まえ地域の方々で議論していくことが大切である。

●国内旅行が不振の中、ヨーロッパ旅行だけが延びている。その要因は、ヨーロッパのまち並みを歩くことが好評であるということ。日本では、まち並みを歩いて旅行することが少なくなってきた。これからの観光は、まち歩きがキーワード。新潟県村上市では、お金が無い行政には頼らず地域住民で寄付金を集めて、良好な景観を形成している。その結果、村上市は現在、まち歩きとして有名になった。

●人は心地よい空間と雰囲気を求めてまち歩きに行く。景観は、来訪者が最も重視する要素となっている。地域住民、観光客の双方にとって、心地よい空間・雰囲気、これが景観である。景観とは、単に目に入る風景・景色ではない。問題は、地域住民、観光客の双方にとって、心地よい空間・雰囲気とは何かということを議論しなければならない。

●行政は自分たちの価値観を押し付けずに議論の場をつくって欲しい。景観というものしっかり認識

して、それをみんなでどうやって合意形成し、育んでいくかの論議の場を保証しなければいけない。住民側もきちんと発言をする必要がある。景観は建設的議論により、形成していくものである。

●良好な景観を守るためには、ある程度の規制は必要である。最近は、規制緩和の時代になってきているが、全てを良しとすると必ず景観が壊されてしまう。そういった議論も大切である。

●東北地方で訪れたい場所のアンケートを取ると圧倒的に仙台市という回答が多いが、もう一度訪れたいという人は半数ほどである。理由は、まち歩きができないからである。まち歩きができないことにより、心地よい雰囲気を味わうことが必ずしもできないという点に大きな理由があると思われる。

●観光の質・形態は大きく変わった。そういった中で古いものが見直されており、まち歩きする人は、その地域の暮らしを五感で味わおうとする。心地よい空間や雰囲気という景観をいかにつくり出すかが問われている。

２　パネルディスカッション
～魅力ある美しいみやぎの景観づくりに向けて～

◇コーディネーター
　大村虔一（おおむら　けんいち）氏
　（特定非営利活動法人都市デザインワークス顧問）
◇パネリスト
　清水慎一（しみず　しんいち）氏
　（株式会社ジェイティービー常務取締役）
　佐藤　昭（さとう　あきら）氏
　（塩竈市長）
　鍵　三夫（かぎ　みつお）氏
　（志波彦神社・鹽竈神社宮司）
　山本和恵（やまもと　かずえ）氏
　（東北文化学園大学准教授）

（大村）
　景観法が５年前に施行されたが、これの特色は、市町村が自分たちで作成した計画が法律の効果を持つという新しい法律である。今まで、まちづくりや都市計画で実施できなかったことを、景観法で魅力ある日本の国土をつくり、守ることに向けて具体的に動きだしたものと考えている。
　全国的にも景観法を契機に、従来あまり重要視されなかった景観について見直されてきている。先ほど、清水さんの講演の中でもお話があったように、行政中心で見直しを図るのではなく、地域の皆さんが大切だと思い、支えることが重要である。宮城県内でも、登米市や松島町が景観行政団体に移行し、良好な景観形成の取組みを始めている。
　本日は、多彩なパネリストに参加いただいているので、皆様から御意見をいただきながら、景観についてどう考えているのか、そして、それをどんな方向に持っていけば良いかについて、ディスカッションしていきたいと思う。
　それでは、早速、各パネリストの方々から、宮城県及び塩竈市の景観について、日ごろどのように感じているか伺いたい。初めに、鍵さんは、毎日見ている塩竈の景観、特に神社から見る景観についてどのように感じているか伺いたい。

（鍵）
　塩竈は、多くの歌で歌われており、また、物語や文学に取り上げられた古いまち並みが残っている。西町地区や本町地区では、これらのまち並みを活かした道路整備が行われており、素晴らしいと思っている。道路整備の際は、神社の表坂の整備も関連しており、その際には市民の皆さんの御意見と行政の方々の御指導を頂戴しながら、今のような形になった。
　最近では、少人数でまちの中を散策する姿も目立ってきていると感じている。市民の皆様と行政の

思いというものが、塩竈の景観を支えているのではないか感じる。

（大村）
　塩竈という大きなまちの中にありながら、自然の豊富なところに神社があり、四季折々の景観を楽しめ、また、知的な好奇心を追いかけて参詣し、まち並みを歩く観光客も多くなったという意見であったかと思う。
　続いて、山本さんに伺うが、本町地区において「次世代型の住みやすいまちづくりの研究・調査」を行ったとのことだが、その内容についてお聞きしたいと思う。

（山本）
　私は、まちづくりや建物を造る際に社会的弱者と言われている方々について、どのように解決していくかという点を課題としているが、これについては、設計の問題ではなく、住み着き方を考える視点から解決していく必要があると考えている。従来の住宅政策は、住宅を郊外に建てていくことにより、広く薄く住み着く形となっているが、高齢化やエコロジーの点からも、車はほどほどにして歩いて暮らせる町が望ましい。
　研究の中で、モデルとなる地区を探した結果、塩竈市に大きな素質・可能性があるということから、塩竈市を対象に研究をしているものである。塩竈市近辺には、４㎞四方の中に５つの駅があり、歩いて暮らせる町としての平面的な骨格がある町となっている。塩竈市は、この人口減少の時代にあって、うまくやれば他都市からの移住等も含め、人口増が見込める、次世代の理想的なまちづくりが可能なまちであるということをぜひ知って欲しいと思う。

（大村）
　景観の視点よりは、住んでいる人達がどんな形で住み着くのかということであったが、塩竈市は歩いて暮らせるということが限りなく可能な市ではないかということで、２０世紀後半のモータリゼーションが拡散する都市をつくったが、そういう中では非常にコンパクトに、港を中心に集まったまちとして、次世代のモデル的な地区になるのではないかという意見であったかと思う。多分、相当市民が頑張らないと、そういった地区に近付けないのではないかと感じるが、やはり、居る人も来る人も感じることができる、心地よい空間や雰囲気をつくりあげていく必要がある。そういった課題が出てくるかと思う。
　続いて佐藤市長に伺うが、市長は、塩竈の景観の特徴と現状について、どのように感じているか伺いたい。

（佐藤）
　本市には、国内外から多数の船舶が入港するが、その方々から国内にこれぐらい美しい港はないという評価をいただいている。その理由としては、生活空間と港が一体となっているということが挙げられることが多い。また、以前に、海を埋立て、都市部で不足する用地を確保しようという計画を立てたことがあったが、その際、市民の皆さんから身近に海があるべきではないかとの声が上がり、計画は撤回となった。これらのエピソードにも表れているように、本市の景観の特徴としては、海洋・

港湾の景観という点が挙げられると思う。
　また、塩竈神社から千賀の浦を見渡すと、現在、多くのビルやマンションが建っているのが視界に入る。このような状況から、平成５年に「塩竈の景観を守り育てる条例」を制定した。このまちを考えていく時に景観行政をしっかりと進めていかなければならないという、大きな反省になった契機でであった。景観は、その地域の生活者の意志が直接伝わるものではないかと感じている。本市の美しい景観は、市民共通の資産であり、まちづくりの中に定着させていくことが必要と考えている。

（大村）
　埋立ての計画があった時に、反対したのは市民の声であり、その結果、今の姿を留めたという大切さが出ていたし、その理由が、塩竈では身近な海が大切だという意見であったということは、景観の考え方に通じる。
　また、千賀の浦に関しては、奈良・平成の時代から有名な場所であり、歌人なんかにとっては憧れの場所であって、多賀城と緊密な関係にあったかと思われる。東北の中でも歴史がある地域であり、興味がある良い所を持っている場所だとういうことがわかった。それから、塩竈港が皆さんから美しい良い港だと評価されることについては、これは私の直感で間違っているかもしれないが、港は商業や工業、流通や漁協など縦割りにされており、そのためか住んでいる人の暮らしが見えにくいものになりかけているものが多いが、その中でも港というのは景観的に面白い要素を沢山持っている場所の一つである。そのことから、塩竈には持っていた良さがあると感じ受けとめた。
　続いて、こういった良好な景観を守り、どんな景観をつくっていくのか、景観を形成していくことの意義について伺いたいと思う。初めに山本さんに伺いたいが、様々な活動の中で、良好な景観形成と住みやすいまちづくりの関連性について、どのように考えているか伺いたい。

（山本）
　そもそも景観と言うのは、そこで生産をするとか、人間の生活の実態があって、それが現れる形として形成されるものと思う。まちづくりにおいては、地域の人々が理想を共有するということが大事であり、その意味で市民が中心となって行うしかないものである。塩竈の中には地域の資源となるものが散在しているが、これを活用することで、十分、外からも人を呼べるものがあると思うし、歴史的背景・風土を持ったものを目に見える形で守っていく必要があると考える。このような地域づくりによって生活が活性化していくことで、景観の方も魅力的なものになってくると思う。

（大村）
　景観とは単なる姿だけではなく、生活がつくり上げている部分が非常に大きいものだと感じる。その姿が美しいというものを求めて、自分もそういったことを体験したい人達が観光という形で動くということだと思う。そのような話から、地域をつくっていく実験で、大切にしていること、住民発信の計画のつくり方、一定の地域を、総合的に理想を皆さんで共有してつくっていくまちづくりの方法について、話を頂戴した。
　続いて、清水さんに、良好な景観の形成を通じた観光振興などにつながる効果や手段について伺いたい。

（清水）

今までの話の中で市民がつくり上げるという趣旨の言葉がよく出てくるが、今日、お集まりいただいている皆様が本当に主体となっているかという点、例えば、塩竈市民として塩竈の景観形成に大きな役割を担っているのか、また、担っているという活動をしている実感を持っているか、ここが一番問われると思う。日本では、行政が音頭をとらないとなかなか進まないというところがあるが、行政の方には、ぜひそうした場をつくって欲しいと思う。 今までのお話の中で、暮らしや観光における課題・論点はおおよそ見えているから、あとは優れたコーディネーターのもとで実行あるのみと考える。また、仮に合意形成ができない場合でも、その際は強行しないという点も重要である。このことも心に留めておいていただきたいと思う。

（大村）

清水さんの発言は、実現するために更に一歩進んだ内容だったと思う。市民型の社会やそういった社会の中でＮＰＯが果たせる役割という話はここ１０年議論されてきたが、理念はようやく理解され初めてきたものの、実戦論が無いではないかという指摘かと思う。まずは、小さなワークショップのようなものから始めてもいいので、行政はそういった場をつくり、ファシリテーターのような外部の人間をおいて、少しずつ色々な場面で実験をしてみるということが大切ではないかということだと思う。それで決まらないことがあっても、強引には進めないというような形で、合意形成の仕方を本気になって取組む必要があるのではないかという指摘であった。まちづくりに長く携わっている私も、まったくそのとおりだと思う。

続いて、鍵さんに鹽竈神社の宮司として、また市民として塩竈の景観を守るための必要性や意義について、どのように考えているのか伺いたい。

（鍵）

神社には２０年に一度の式年遷宮という行事がある。現在の建物の前の前、伊達政宗公の時に造営された。これを慶長の造営と申すが、この時を第１回とし、その後、寛文の造営、元禄の造営があり、元禄の造営の社殿が今に伝わっている。平成２３年度に第１８回目の式年遷宮を向かえる。そして、式年遷宮を記念して、多くの市民の皆様方、あるいは全国の皆様の御協力をいただいて、修理を行う予定になっている。このように２０年に１度修理を行うことによって、歴史的建造物が今も伝わっているということであるし、また、御本殿は檜の皮で拭く檜皮葺（ひわだぶき）を行っており、そういった伝統的な技術の伝承にも繋がっている。先人の知恵が塩竈の景観を伝えていると思っている。歴史ある建造物を保存、継承していくことが私どもの務めであると考えている。

（大村）

長いこと継承されている神社の景観は、昔からあるものがただ存在しているわけではなく、２０年に一度の式年遷宮の繰り返しによって持続されているというお話であった。タイミングをつくりながら話を進めていくことも必要と感じた。永続的に何かを続けていくこと、未来永劫これであるということを決めることはなかなか難しい。あるタイミングを区切りながら少しずつ進めていくという知恵は、神社の景観を維持していく行為にあるのかなという話を伺った。

続いて、佐藤市長に塩竈市として良好な景観を推進していくことの意義について、どのように考えているのか伺いたい。

（佐藤）
先ほど、清水さんから、行政の立場として耳の痛いお話があったが、最近、本市の景観形成について、亀井邸の保存など、市民参加による新しい取組が起こりつつある。市内には歴史的・文化的な資源、景観が多数存在するが、市民の皆様が塩竈の景観を守り育て、後世に受け継ぐという気持ちを持つとともに、行政が市民の皆様に塩竈に誇りを持って住んでいただくという気持ちで、まちづくりに取り組まなければならないと考えている。ひいては、このことが観光の振興や地域の活性化にもつながっていくものと考えている。

（大村）
市には平成５年制定の景観の自主条例があるが、今後の取組は、より積極的な意味合いを持つものになってくる。そこで、登米市や松島町に続き、景観行政団体への第一歩を踏み出すお気持ちはないか伺いたい。

（佐藤）
市の景観形成において、市民の参加を促す場の設定が大切という話を先ほどからいただいているが、今後それを進めるきっかけとなるのが景観行政団体移行への取組になるのかなと考えているので、もう少し行政も積極的に打って出たいと考えている。

（大村）
まずは、行政が場をつくることが大切で、そういった方向で第一歩を踏み出していただけるような発言だったかと思う。
最後に、良好な景観を形成するための手法や取組について、皆さんに伺いたい。まず、清水さんに伺うが、塩竈の景観資源の活用等に向けてのＰＲの手法などについて、どのようなものがあるか伺いたい。

（清水）
私は講演などの際には、その地域の２０年前、現在、何もしないときの２０年後の絵を描いて、その３つを見せ、それで皆さんどうしますかと問いかける。このようにするとベクトル合わせが楽なような感じがする。

（大村）
都市計画の絵というのは、色々と色を塗っているが、将来どうなっていくのかわかない。今の清水さんの言うとおり、２０年後の絵姿を見せた方が、皆さんの納得のいくお話しになると感じた。続いて、鍵さんに今後の塩竈の景観に対する思い、求められる塩竈の景観の姿について伺いたい。

（鍵）
　景観への取組は行政や神社だけでは難しいと思っている。神社との関わりでは、現在は既に撤去されているが、市民の皆様の御尽力により、神社から見えるスーパーの看板の色を変えていただいたり、市民の皆様に取組んでいただいた成果が徐々に現れていると感じている。今後は、塩竈らしい海、社、食を活かしたまちづくり、景観づくりに一層努めていただければと思う。

（大村）
　引き続き山本さんに塩竈の景観を守り、つくっていくための視点や手法について伺いたい。

（山本）
　私は、塩竈は海と神社のまちと言い切って良いのではないかと思う。そこで、神社から見る海、または海から見る神社の景観を大切にすること。そして、海岸線が段々後退していく関わりの中でのまちをもう一度見直していくこと。また、海に近いエリアはウォーターフロントエリアとして、いかに海と親和していくのかを考えていくこと。このように、断面の方向で整理をしていくと塩竈市は面白い提案ができると考えている。塩竈は歩いて暮らせる丁度いい形をしているのにも関わらず、塩竈の市民はまちの中心で生活をしている人が少ない。これは非常にもったいないことなので、まちの中心で暮らすことを努力していただきたいと思っている。それから、今あるものを活かすことだけでも、塩竈は遊べるまちになっていると思うので、市民の方についても、暮らして楽しめるような姿勢から始めていただけると、景観形成上、おもしろい方向性が見い出せるのではないかと思う。

（大村）
　最後に、佐藤市長に今後、市としての景観形成に対する取組について、どのように考えているのか伺いたい。

（佐藤）
　今後、景観を考える上で、行政の壁は必要がないのかなと考えている。塩竈市、多賀城市、松島町、七ヶ浜町そして利府町の２市３町が連携をして景観形成を進めていかなければ、大きなものに昇華していかないのではないかと感じている。今後は、景観それに結びつく観光、あるいは産業、商業全ての面で、地域という単位を大きく考えて様々な行政を推進していくことが、今、我々行政に課された大きな課題と考えている。本日のフォーラムを契機に、我々行政も改めてこのまちの景観というものがどうあるべきか、ということを考えていかなければならない。

（大村）
　地域の人達の楽しい暮らしや将来に夢をつくっていく暮らしなど、地域の歴史をみんなで学んで、そして地域の暮らしを楽しむ住民や企業の方々の参加が一層大切になり、それが必ずしも市町村という枠に縛られないで、もっと大きく考えるということ。観光で考えると、仙台から多賀城、塩竈、松島まで含めた視野でなければ、なかなか上手くいかないと思われる。そういった視点につながっていくような方向で、景観ということについて、地域の人達と一緒に考えていくという、今日のフォーラ

ムはその第一歩であったということで、終わらせていただきたいと思う。